

[掲載紙] 朝日新聞「上州経済風信」
[掲載日] 2012年5月10日
[テーマ] 県内経済の明日—多様さ生かして成長を—

群馬県が利根川を越えて埼玉県側に飛び出した伊勢崎市境島村の堤防に上がると、360度のパノラマが開ける。眼前には上州の野が広がり、奥に並ぶ山々は、それぞれに個性的だ。川あり、野あり、山あり。地勢の多様さは、県内経済に通じるものがある。



県内の製造業の現場では、必要とされる言語の多様化が進んでいる。ある工場では、一つの部門がまるまる日系ブラジル人のチームに任されていた。工場を訪れてポルトガル語の掲示を目にすることはよくある。中国人留学生を幹部候補生として採用している企業も多い。先月、館林でお目にかかった企業経営者は、インドネシアへの進出を念頭に、社員に現地の言葉を学ばせているという。

「ものづくり県」と言われながら、小売業で有力な企業が育ったことも多様性の一つだ。県内に本社を置く企業について、県外分も含めた売上高を業種別に集計すると、小売業が33.7%と最も高く、その比率は47都道府県でトップという調査結果もある（帝国データバンク）。

■小売業の売上高が全産業総売上高に占める構成比

順位	都道府県	小売業総売上高 (百万円)	構成比
1	群馬	4,093,413	33.70%
2	千葉	5,152,069	21.85%
3	秋田	744,160	21.75%
4	福島	1,721,601	20.65%
5	和歌山	784,477	19.78%
6	栃木	1,861,048	19.44%
7	島根	505,445	19.11%
8	岩手	863,575	18.68%
9	滋賀	980,536	18.55%
10	高知	602,225	18.36%
	全国	123,694,160	9.58%

※帝国データバンク前橋支店「群馬県内企業の産業構造分析」(2010年12月)から

スーパーや量販店の現場では、商品の品質改善や効果的な広告手法の導入、増える高齢者を取り込むための店舗設置の工夫など、さまざまな取り組みにより、日々進歩が絶えない。特色ある商品を打ち出すことで、目下成長中という企業もいくつもある。

さらに、嬭恋村のキャベツを筆頭に、知名度の高い農産物があることも多様性。その舞台裏は、穏やかな農村風景とは対照的だ。昭和村のレタス畑にひょうが降ると、納入先の手外食チェーンの担当者が東京から駆けつける。品質への影響を確認し、すぐにその後の栽培方針を話し合う。

収穫した野菜を冷蔵トラックに積み込む前に一気に冷やすJAの予冷施設は、工場そのもの。鮮度を保ったまま首都圏に送るには大規模な設備投資が不可欠というわけだ。施設で目にした標語は「産地間競争に打ち勝とう」。強さの秘密をみる思いがした。



多くの面を持った群馬の経済は、それぞれに力強い。今月、異動により上州を離れることになった。県内経済が多様さを生かして時代に合わせた変化を遂げ、五月晴れの空に舞う大小のこいのぼりのように、これからも雄々しく伸びていくことを信じている。

〔 日本銀行前橋支店長
竹澤 秀樹 〕